



毎日がプレゼント ～樂聴、再発乳がんを生きる～

連載 第3回

「乳がんとの第2ラウンド始まる」

樂聴（音楽療法士・ピアニスト）

全4ページ

心強いサポーター

2021年6月15日、運命の日がやってきました。晴れ渡った早朝、「還ってきた乳がん再発患者」として、手術をした病院に向かいました。病院はコロナ対策が徹底し、入り口から受付終了までが閑所のような雰囲気でしたが、この日付き添ってくださるがん患者団体の代表で友人でもある波多江さんの顔を見てホッとしました。波多江さんは「再発転移が分かって、彼女はどんなにか落ち込んでいるだろう」と恐る恐るやってきたそうですが、自分より明るい私を見て、拍子抜けしたそうです。

乳腺科の待合室で、主治医となる先生はどんな方なのか、どんな検査があるのか、期待と不安で一杯でしたが、波多江さんが、再発後の治療法や生活などについてアドバイスして下さり、心強い限りでした。「再発の治療の目的は、今以上に病巣を大きくしないこと、症状緩和、QOLの維持、生存期間の延長にあるので、継続的な薬物療法がメインになると思う。必要に応じて放射線治療を組み合わせることもあるけど。あと10年は生きられるかな、私の方が先に逝くかも」などと笑いながら話されましたが、知識も経験も豊富で、いつも最善の手助けをしてくれる彼女に付き添ってもらえたのは幸いでした。

信頼できる主治医と出会う

掲示板に私のナンバーが掲示され、診察室に入りました。初対面の先生は、勿論マスク着用ですが、優しい眼差しが印象的な明朗快活な方だったので、緊張感は一瞬で吹き飛んでしまいました。今までの経緯についての質疑応答の後、血液検査、尿検査、胸部X線撮影、マンモグラフィ、超音波画像診断、そして最後に針生検という一連の検査を受けました。マンモグラフィは、10年前とは比べものにならないくらい改良されていて、痛みも少なく時間も短縮され、安心して受けることができました。一般には「マンモグラフィは痛い」と思われ敬遠されがちですが、最近は無痛で検査ができるMRIもあるとか、近い将来、もっと多くの女性が気軽に乳がん検診を受け、乳がんの早期発見に繋がれば良いなあと思います。最後の針生検は、初発時の針生検での痛みや出血を思い出し、恐怖を感じていましたが、麻酔を打つ時点で先生の技術の高さを感じ、「この方は極めて優秀なお医者さまなんだ」と内心驚き、あとは信頼して任せることができました。

この日は、これで終了となり、あとは次回の予約と会計を済ませるだけでした。外を見ると、朝の晴天が嘘のように土砂降りの雨でした。「検査が終わったら美味しいランチを食べに行きましょう」と波多江さんと約束していましたが、時間はとうに夕食に近い時刻、「食事はまた別の日に」ということで、お互いに帰途につきました。

母の納骨

帰宅後、この日の受診を心配していた友人たちからメールや電話がありましたが、検査が無事に終わり、信頼できる主治医に出会えたことに皆安心していました。病院での一連の出来事や私の事を気に掛けてくれる人々の思いが有難くて、親友への返信メールに書きました。「一人で生まれ一人で死ぬって当たり前のことだけど、誰かがそばにいてくれるのはとても大切なこと。離れていても心に掛けてくれる人がいる、それだけで歩いて行ける。」

病院での検査に続き、母の納骨の日がやってきました。コロナ禍のため出席者は私ひとり。最後に遺骨をしっかりと抱きしめ、語りかけました。「お母さん、生んでくれてありがとう、育ててくれてありがとう、たくさんの愛をありがとう。がんは大丈夫だから」。



納骨堂の棚には、両親の骨壺がぴったりとくっ付けて置いてあります。照れくさそうな父と満面の笑みの母が目浮かびます。『比翼連理』という表現がぴったりの本当に仲の良い夫婦でした。ちなみに、二人とも私の乳がんへの罹患は知らずに逝きました。私の決断でしたが、今となっては、これも親孝行のひとつと思っています。

検査結果

1週間後、検査結果の説明があり、右の乳房への転移はなく、肺と胸部リンパ節にがん病巣が認められると言われました。全摘した左胸の皮膚下、または乳がんになった最初の時点から体のどこかに微小転移として潜んでいたがん細胞が、手術や薬物療法を潜り抜けて長い年月を経て成長し、目に見えるくらい大きくなって見つかったのだそうです。そういえば、去年の検査では全く影も形もありませんでした。この1年で急成長をしたのでしょう。原因として思い当たるのは、仕事上のストレスと母の死が近いことを知らされて気持ちが落ち込んだことくらいです。結果の説明がひと通り終わると、先生は、再発・転移を知った時の心理状態について質問をされました。

当時の私はショックのあまり無痛状態に陥っていたので、「ショックを受けましたが、5月に母が亡くなり、これからは一人で強く生きていこうと思っています」と拳を握りしめながら答えました。「この人は大丈夫」と思われたのでしょうか、以後、先生は同様の質問をされることはありませんでしたが、この時の無痛状態のことやその後の精神的葛藤については、翌月以降の受診時にお話ししました。

骨年齢は若かった！

最後の検査として、骨への転移と骨密度を調べるために骨シンチグラフィを受けましたが、私の骨は実年齢より30歳ほど若いことが分かりました。コロナ禍でデスクワークが増え、運動もままならぬ日々が続いていただけに、この結果は嬉しい限りでした。6月29日の診察で、先生は、「職員健診で分かったくらい自覚症状もなく、命にどうこうという状態ではないので、今までと変わらない日常生活を送るように。仕事も続けて」と言われ、「今日からホルモン療法を始めましょう！」と明るい声で仰いました。術後服用していたのと同じアロマターゼ阻害薬を使用することになり、副作用について詳細な説明を受けましたが、先生は、「個人的にどんな症状があらわれるのか分からないので、異変があれば何でも言って欲しい。ピアニストは指先の感覚が繊細だから、普通の人よりもしびれや痛みを感じるかもしれない」と言われ、ピアノ演奏への影響を心配されていました。しかし、私は、「ホルモン剤でこれ以上体重が増えたらどうしよう。ダイエットはしたくないし、着る服もなくなるだろうし」と別の心配をしていました。



糸島市二見ヶ浦の夫婦岩にて 2020年夏 撮影：樂聴

ホルモン療法がスタート

治療法が決定し、アロマターゼ阻害薬の服用も始まったので、職場の上司や関係者にこれまでの経緯や結果を報告し、検査・受診や体調の変化に伴い有休を使う機会が増えること、将来仕事に影響が及ぶ可能性があることなどを説明しました。経営者側から、「治療や体調を第一に考え、必要に応じて有休を取り、仕事は第2第3に考えて」と協力的な回答があり、大いに安心すると共に、心から感謝しました。再発・転移乳がんのホルモン療法は、こうして良いスタートを切ることができましたが、主治医との二人三脚も始まったばかり、そして、まもなく、心に大嵐が吹き荒れることになるのです。

(次回に続く)



福岡がん患者団体ネットワーク

がん・バッテン・元気隊

電話 090-9591-7469 (10:00~22:00)

FAX 092-873-2372

E-mail <http://ganbatten.info/contact.html>